
ゼロの使い魔、たっくんが使い魔になりました。

セラフ零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔、たつくんが使い魔になりました。

【Nコード】

N3760Z

【作者名】

セラフ零

【あらすじ】

ただ単にゼロの使い魔でルイズがサイトの変わりにたつくんを召喚してしまいましたっただけです。

割とタイトルの割には中二要素が満載です。主にシリアス的な意味で。

555は好きだけど話の流れは小学生のとき以来なのでうる覚えです。

設定をウィキで調べながら行きます。

ただの思い付きです。

出会い、召喚と狼と仮面

……ここは何処だ。

一人周囲を見回してそう思う。

確かに自分はある時灰に成り果ててしまったはずだった。だというのに何故ここにこうして立っているのだろうか。

目の前には桃色の髪をした少女が一人。

その周囲には彼女と同じ年代と思われる少年少女たちが一様に自分のことを見ている。

服装から推測するに、彼女たちはおそらく学生なのだろう。

一人だけいる頭の輝くおっさんは引率の教師と見たほうがいいだろう。

なにやら桃色の髪の少女が頭の輝く男に何かを訴えているかのようだがそれは聞き届けられなかったらしい。

肩を落とし、少し赤くなりながら彼女はこちらに近づいてきた。

「感謝しなさいよね。貴族にこんなことをされる事なんて、ないんだから」

何を言ったのかは解らなかったが何かをしようとしているのは解る。

「おいお前！ 一体何を」

彼がその言葉をつむぐ前にその口は少女の口で塞がれた。

唐突の事に驚きで言葉を失った。

そして我を失っているその一瞬の後に彼の体に異常が起こる。

左手の甲から全身に広がる苦痛。

焼けるような痛み。

何かが刻み込まれるかのような、そんな痛み。

まるで自分の体に烙印を押されるかのような、そんな歪な苦痛に彼は耐える事が出来ずに気を失ってしまふ。
この邂逅が何をもたらすのか。
今はまだ、誰にもわからない。

出会い、召喚と狼と仮面（後書き）

さて、オリジナルの展開にするか。

ある程度原作に沿ったシナリオにするか。

ゼロ魔は全部読んでないから無理だろうしな！。

異なる世界の異なる人間（前書き）

たった二話分の話を作るのにこれほど時間がかかるとは。
うる覚えで書くのは良くないね。

アニメを見ながらだし。

しかもたつくんの性格は忘れてるし。

サイト……実は君も入れたかったんだ。

でも、君を化け物にするのには些かあれだったのだよ……そして君
と巧が一緒にいられる理由が見つからなかったんだ……。

ごめんよ。本当にごめんよサイト……。

異なる世界の異なる人間

「夢を持つとね、時々すつごく切なくて、時々、すつごく熱くなるんだ」

「夢つてのは呪いと同じなんだ。途中で挫折した人間はずっと呪われたままなんだ」

「俺には夢がない。でもな、夢を守ることは出来る」

「俺はもう迷わない。迷っている内に人が死ぬのなら……」

「戦うことが罪なら」

夢を見た。

ひどく懐かしい夢だ。

あれは自分が人として戦う力を得た頃の記憶。

赤いフォトンストリーム、銀色の装甲、黒いスーツ、黄色の複眼。

まるで英雄ヒーローのような姿となって彼が対峙していたのは、灰色の化け物と呼ぶに相応しい生物。

何故今更こんな夢を見たのだろう。

まるで走馬灯のよう。実際彼は死んでいるのだから間違いはないだろう。

「やっと起きたのね」

巧が目を覚ますとそこはどこかの部屋だった。

昼間いた場所は広場だったから運ばれたのだろう。

黙って彼は周囲を見渡す。

ベットにクローゼット。小さなテーブルが一つ。

おそらくここは彼女の部屋なのだろう。

小ぢんまりとした部屋だ。シャワールームがないどころか、電気もない。部屋に明かりを灯しているのは蝋燭のみ。

「おいお前。お前は一体なんだ。ここは一体何処なんだ」

「まったく、貴方を運ぶの大変だったんだからね。あんなところで気を失って。ご主人様にいきなり迷惑をかけてから」

巧の言葉など聞こえてもいないかの様に、彼女はただ一人話を続ける。

「お前いい加減にしろ。人の話を聞け！」

彼が叫ぶとルイズは鬱陶しそうに頭を左右に振る。

「ああ、もう。五月蠅いわね！ ええっと、確か沈黙の魔法を……」

彼女はそういうと、ぎこちない口調で呪文を唱える。

当然の如く魔法は本来の意図に反し爆発を起こす。

それに驚くことも無くルイズはケホッ、と咳を一つする。

「お前は俺を殺す気か！」

突如と起きた爆発に驚きながら怒鳴りつける。

え？ と。彼女はきよとした表情で巧の顔を見る。

「というか、一体何が起きたんだ！ 何も無い所から爆発が起きるなんて」

「解る！」巧の言葉をさえぎってルイズは声を上げる。「あなたの言っていることが解るわ！」

「ああ？」

それに対して怪訝そうな表情をする巧。

今まで自分の言葉は理解できていなかったとでも言うのだろうか。だとするのなら問い尋ねても鬱陶しがらただけで相手に伝わらないのも理解できる。

面倒くさそうに頭をかくと、溜息を一つ吐いた。

「で、ここは一体何処なんだ。そもそもお前は俺のご主人様とやらじゃないだろ」

その場に座り込みながら、巧は尋ねた。

ちらりと左腕も確認しながら。

「ここはハルケギニアにある、トリステイン魔法学校よ。あんたは私の使い魔として召還されたの。それより、あんたの名前をまだ聞いていなかったわね」

「人の名前を尋ねる前にまずは自分の名前を名乗ったらどうなんだ」
「……態度は気に食わないけど。まあ、良いわ。私の名前は、ルイズ・ド・ラ・ヴァリエールよ」

「本当に外人みたいな名前だな。の癖に日本語しゃべれるじゃないか」

「さっさとあんたの名前を言いなさい！」

「俺の名前は乾巧だ」

「変な名前ね」

「無駄に長いお前にだけは言われたくねえ」

鼻で笑いながらさういう巧。正直どうでも良いのだ、名前のことなんて。

「全く、どうして私の使い魔がこんな礼儀もなっていないただの平民なのかしら」

うんざりした風に彼女は肩を落とす。

全くもって心外だ。此方は好きで呼び出されたわけではない。むしろ迷惑しているのだ。

普通の人間ならこんな性質の悪い宗教か何かだと思はずだ。それ以前にこんなものは明晰夢の類だと思うに違いない。

一瞬だが巧もそれに順ずるものか何かだと思つたのだ。

だが肉体に至る痛みは現実のもの。それはこれが現実であるという覆しようのない事実。

それに、彼自身がまるで悪夢のような体験をしてきたのだ。

死者が化け物となつてよみがえるなんて。どこぞのB級映画じゃあるまいし。

「俺が知るかよ。つたく……」

溜息を一つはくと、そのまま元いた場所で横になる。

「ちょっと、話はまだ終わってないわよ！」

「うるせえな。もう寝かせろよ。色々あつて疲れてんだよ」

それつきり巧はなにも言わなくなつてしまった。

どうやら本当に寝てしまったのだろう。

溜息をはくとそのまま彼女も着替えて寝ることにした。

この使い魔に振り回されてばかりでルイズ自身も疲れたのだろう。

すぐにまどろみへと意識を手放してしまった。

そして翌朝。

「朝よ、早く起きなさい！」

能天気なのか図太いのか、敷き詰められた藁の上で寝転がっていた巧を起こす。

うなり声を上げながら、巧はゆっくりとその体を起き上がらせる。この状況で十分な休息を取る事ができるなんて、どれだけの図太い神経をしているのだろうか。

「まったくご主人様よりも長く寝るなんて。出来損ないも良いところだわ」

「だから俺はお前の使い魔とやらになつたつもりはねえ」

面倒くさそうに彼は言う。

「黙りなさい。貴方の左手に刻まれているルーンがあんたが私の使い魔である何よりの証拠じゃない！」

ルイズは怒鳴りつけると適当に引つ張り出した制服を巧に投げつける。自分の下着もついでに、だ。

「おい、こいつは一体何のつもりだ」

「私に着せるのよ」

「はあ？ そのくらい自分でやれよ」

「普通貴族は召使を抱えている場合、自分で着替えなんてしないのよ。わかった？」

「ふん、つまりは自分では何にも出来ない役立たずって事か。だから着せ替え人形みたいな事が出来るって事か」

「へえ、ああ、そう。じゃあ貴方には罰を与えないとね」

少しばかり考え込むと彼女はすぐに答えを出した。

「そうね、これから貴方に朝食を出そうと思っていたけれど、そんな態度を取るようならご飯はなしで良いわね」

どうやら彼女が考え付いた罰というのは食事をなしにするというもののらしい。

彼も生物である以上、空腹には勝てないと判断したのだろう。普通ならそうだが、乾巧という人間は違った。

「ああ、別に構わないぜ。俺は俺で、食料を調達してくるからな」
そんな軽口をたたくと、彼はゆっくりと立ち上がって扉へ向かう。

「ちよつと、一体何処へ行くつもり？」

「言っただろ。俺は俺で調達してくるってな」

「使い魔がご主人様のそばを離れる気!？」

「だから何度も言わせるな。俺はお前の使い魔じゃねえよ」

それだけ言つて部屋を出ようとしたその時だった。

背後から突然首に枷をつけられたのだ。鎖のついた首輪。

さながら犬のようなそれを手で触って確認する。

「一体なんだよこれは!」

「私の使い魔が勝手に行動しないようにするための鎖よ。まったく念の為に準備しておいて正解だったわ」

「俺は犬でもねえぞ!」

「黙りなさい。貴方はそれをつけていれば良いのよ」

ふざけるな! と巧は怒鳴りつける。けれどルイズは何処吹く風か平然とした態度で鎖を引っ張って柱にくくりつけた。

その気になれば巧はこんなちゃちな鎖一本引きちぎれない理由がない。

だがそれをする為に力なんて使いたくないのだ。
自分が忌み嫌う力を。

巧がその場に座り込んで黙りこくっている内に、ルイズは制服へと着替える。

目の前に男がいるなんて意識すらしていない。ただ、そこに物がある程度の認識に過ぎないのだろう。

手早く着替え終わると、そのまま鎖を引つ張って部屋を出る。

ても動かないつもりだったが、思ったよりもルイズの力が強くて仕方なしについていくしかない巧であった。

「おい、これから一体何処へ行くんだ」

「五月蠅いわね。朝食よ」

「は、食事抜きの俺に自分たちの食事を見せ付けるってか」

「それは貴方が悪いのよ。貴方が私に従えば、最低限の食事、生活は確保してあげると言ってるの」

「それで俺に使い魔をしるってか？　こんなわけも解らない世界にまできてどうして訳の解らん事をしなけりゃならねえんだよ」

「良いから黙ってついてきなさい。どうせ、貴方は元の世界に戻る方法なんて無いんだから諦めて私の使い魔をしたほうが賢いと思うけど」

「……別に俺は元の世界に戻りたいって訳でも無いけどな」

「何か言った？」

「別に」

「不服があるなら勝手になさい。私だって別に好きであんたを召喚した訳じゃないんだから」

「そうかよ。こっちも良い迷惑だぜ。折角人が感動的な別れをしていたって時に」

「別れ？　あんた一体何をしてたの？」

「色々だよ色々」

「その色々って何よ。気になるじゃない」

「別にお前やこの世界には関係の無い話だ」

全く持ってその通り。

この世界に灰色の化け物はいないし、そもそもあのベルトも此方には無い。

今更、昔のことを語った所で何の意味もない。

どうせ、この世界からしても荒唐無稽な話だ。

目の前のこの自意識過剰な少女が信じるとは思えない。

あの世界は今、どうなっているのかは気になるのだけれども。

前までなら、彼はどうでもよかったのだろう。

でも、夢が出来た今の彼には、気になって仕方が無いのだ。

(夢は呪いと一緒……か)

ふと、そんな言葉を思い出した。

確かに意味は解った。

その夢を実現する前に、自分は自分という存在を失ったのだから。

「だから、そんな言い方をされると余計に気になるじゃない！」

「良いだろなんだって。話したところで俺の待遇が変わるわけじゃ

ねえんだから。それに一体お前と何の関係があるってんだ」

「関係あるわよ。使い魔は一生変える事が出来ないの。つまり、使

い魔のことを知るのには主人としての義務よ」

「そうかよ。俺は話したくないがな」

「ご主人様の……ってあなたに言っても無駄だったわね」

溜息をかくとそのまま先へ進んでいくルイズ。

その後ろを巧は不機嫌そうな表情でついていく。

今更、あんな話をしたところで本当に何になるというんだ。

あんな凄惨な、下らない人間の物語を。

やがて食堂までたどり着くと、一斉に好機の瞳が二人に降り注ぐ。

「尊の人間の使い魔だ」

「思っていたよりも結構格好良いわね」

「でも鎖なんて」

「よっぽど暴れたんだろうな」

「所詮は平民の使い魔だな」

「品性のかけらも無い」

「格好もみすばらしいですし」

「僕の美しさには到底及ばないさ」

それぞれが好き勝手に言葉を口にしていく。

それを聞こえないフリをしながらhつありは歩いていく。

「ほら、早く椅子を引きなさいよ。気がきかないわね」

「お前が立派なレディって奴だったら、気を利かせてやっても良いがな」

そんなことを口走りながら、巧は椅子を引いてやる。

しかし、朝から随分と豪勢な食事だ。

貴族とやらは朝からこんな豪勢な料理を食べているのか。

まったく金の無駄遣いだ。こういった所で細やかな節約が行えないから、金策に困ったりもするのだ。

「本当なら使い魔は外で待機させるのだけど、特別に一緒にいさせているだけでもありがたいと思いなさい」

「ああそうかよ」

鼻で笑ってそっぽを向く巧。

まったく、この目の前の桃色の髪をした娘の気位の高さには辟易する。

これだったら、園田真理のほうが幾分かまともだった。食事が始まる前に全員が両手を組み合わせ、目を閉じた。漫画やテレビで見たことがあるが、実際に目で見るのは初めての光景だった。

「偉大なる始祖ブリミルと女王陛下よ今朝もささやかなる糧を与えたもつた事を感謝します」

こういった宗教じみたことをやるのは初めて目にする。下らない、巧はそう感じた。

ささやかなる、なんて持ち得ないものからすれば豪勢なことだ。実に自分本位で勝手な言い分だ。

それに神なんているものか。

いるのだとすれば、今すぐにも自分を生き返らせて欲しい。なんて下らないことを考えながら空腹に耐える。

幾ら彼でも食事抜きというのは、少しつらいものがある。

目の前では自分よりも年下の少年少女たちが豪勢な食事を取っているのだ。これでイラつかない人間がいたら見てみたい。

かちやかちやと食器が音を立てていく中をただ一人、巧は黙ってみているのだった。

食事を終わると外へ庭へと出て行く。

食後の散歩という奴だろうか。

石で作られた階段を下りていくと、芝の生い茂る中メイドが給仕をし、テラスで優雅に会話を楽しむ生徒たちがいた。

その傍らには、今まで見たことも無いような生物たちもいる。

「今日は二年生の授業はお休みなのよ。召還したばかりの使い魔とコミュニケーションをとるのよ」

「……俺は頼まれたってごめんだがな」

心底気持ちの悪そうな目をしながら巧はそう呟いた。

中には犬のような使い魔もいる。

それをまじまじと見ながら溜息を吐いた。

あんなことをされてたまるか、という思いが思いっきり伝わってくる。

「あら？」ふと、声がかかる。

その声に振り返ると、真つ赤なトカゲのような何かを撫で回している褐色の美女がそこにいた。

巧が少し驚いたような表情をして唸ると、彼女は微笑を浮かべながら話しかけてきた。

「貴方サラマンダーを見るのは初めて？」

「サラマンダー？」

本当に人間という使い魔の特異性がよく解る。

こんなのが普通にいるのだから。

「そんなモン、俺みたいにつないでおかなくても平気なのか？」

「あら、契約をした使い魔は主人に忠実なの。別に貴方のように鎖でつながなくても平気なの。暴れたりも逃げたりもしないし、ねえーフレイルム？」

彼女の問いかけに返答するかのように無くトカゲ。

どうやら彼女のいうとおりらしい。どうやら知能はそこまで高くは無いうだ。故に、使い魔として忠実に言うことを聞くのだろう。

勝ち誇ったような笑みを浮かべる彼女にルイズは「余計なお世話よ！」と怒鳴りつける。

なにやら悔しいのだろうか。

「ねえ、貴方最初からその辺を歩いていた平民をつれて来たんじゃない？」

立ち上がったって挑発的なことを言う少女。

「爆発で上手く上手く誤魔化したけど」

「違うわ！ちゃんと召喚したのに、こいつが来ちゃっただけよ！」

「ま、ゼロのルイズにはお似合いよねえ」

小ばかにした風に笑い声を上げると、そのまま立ち去っていく少女とサラマンダー。

おーほっほっほ、なんて笑い方をする人間がいるなんて。

まさに異世界、しかも魔法やら貴族という言葉がある世界だ。

「何なのあの女ああ！」

握りこぶしを作ってルイズはそう唸る。

そしてその怒りは巧に向く。

「ぼさつとしてないでお茶ぐらい持つてきなさいよ！」

「鎖で行動制限している奴が何を言いやがる」

「ああもつ！ほら、その鎖を取ってあげるから！」

そういうと彼女は懐から鍵を取り出して、巧の首輪を取り去ってやった。

持っていたということはいつでも外せるようにしておいた、ということになる。

もしかしたら、この少女思っているよりもやさしいのかもしれない、なんて巧は思ってしまった。

「ほら、早く行きなさい！」
「はいはい」

彼女にせかされて自由になった巧は歩いていく。

溜息をはきながらけだるげな表情で、ぼんやりと歩いていると、一人のメイドにぶつかってしまった。

「悪いな」そういつてメイドに手を伸ばす。

「いえ、私も前をよく見ていなかったのだから」

そう言いながら彼女は立ち上がる。

傍らには地面に落ちたケーキが。

それを皿の上に戻すと、メイドが何かに気がついた様に話しかけてきた。

「あの、貴方もしかしてミス・ヴァリエールの使い魔になったって
いう……」

「俺のことを知っているのか？」

「ええ、平民が使い魔として召喚されたってもう噂になってますから」

成程、先程も思ったがやはり人間が使い魔になるという事は特異な事らしい。

一日で一介のメイドにまで話がつたわっているのだから。

「ま、俺にとっては貴族だとか平民だとかよく解らんが」

「魔法が使えるのが貴族で、使えないのが平民なんですよ？」

「へえ、成程な」

だからあそこまでみんな気位が高そうだったのか。

「お前は魔法が使えるのか？」

「とんでもない。私はここでご奉仕させていただいているだけの貴方と同じただの平民ですわ」

こんな世代の変わらない少女が給仕をしなければならぬとは。

どうもやはり常識というものが違うらしい。

アルバイト的な感覚なのだろうか。

いやいや、自分の世界ではこの年頃は大体、高校に通っているのが普通だ。

こんな所で働いているなんて、あまり聞いた事が無い。

「おい、ケーキはまだかい」

気障ったらしい話し方で声が聞こえてきた。

どうやら、このケーキを待っていたのは、あそこになにやら毛むくじやらの生物をひざに乗せて女子と会話していた金髪らしい。

「はいいただきます！」

目の前のメイドはそういうと、そのままケーキを取替えに行こうとする。

巧は一言がんばれよ、とだけ声をかけると自分も本来の目的を達成しようとして移動を開始する。

その途中で「ギーシュ様……」などと呟く栗色の髪の生徒が通りかかった。

それと同時になにやら慌てた風に移動を開始する金髪少年。

ここで巧の脳裏に妙な考えがよぎる。

「もしかして、お前の探しているギーシュって奴は金髪の男か？」
「え、ええ」
「だったらむこうにいたぞ」

巧が指した方向にギーシュの姿を見つけた少女は、満面の笑みで向かっていく。

それに慌てた風にギーシュは苦笑いする。
その光景をしばらく眺めていた巧だったが、やがて「嘘つき！」という言葉と同時に平手打ちを食らって弾き飛ばされるギーシュを見て思った。

何処でも女って生き物は強いものだ、と。
二人が去っていくと周囲から笑い声が響く。

「ふられたなあ、ギーシュ。ま、自業自得だけどさ！」

小太りの少年が嘲笑しながらギーシュにそついう。

その通りだ、なんてぼんやり思いながら彼のことを見ていると、ギーシュは巧をにらみつけて立ち上がった。

「どうやら、君は自分の立場が解っていないようだな」

意味が解らない。

「おいおい、ただの八つ当たりならどっかに行ってくれ」

「君は貴族に対しての礼儀も知らないようだ」

「そうかよ。俺は別にそんなものを必要としなかったからな」

「よかるう、君に決闘を申し込む！」

「決闘？」

「その通り。君に決闘を申し込む」

とうとう頭でも茹で上がったかこの気障つたらしい馬鹿は、なんて思いながらギーシュの会話の続きを聞く巧。

「君は平民の、それも使い魔の分際で僕を侮辱し、あまつさえ二人のレディをも泣かせたッ！」

芝居じみた手振りですういうギーシュ。

貴族つてのはこうも頭の中身が残念なのだろうか、などとぼんやり聞き流す巧。

今やるべきは自分のご主人様気取りの桃色髪にお茶を届けることなのだが。

「泣くどころか、怒っていた風に見えるがな。それにそれは俺のせいじゃねえ、お前が二股をかけるのが悪いんだろ」

その言葉に再び周囲から嘲笑が沸き起こる。

「ッ覚悟は良いな！ ヴェストリノ広場で待ってる」

最後まで気障つたらしい動作で去っていくギーシュ。

ただの馬鹿だろうが、売られたけんかは買うほかあるまい。それに、あんな言いがかりをつけられて黙っていられるか。

「あんた！ なにやってるのよ！」

巧の腕を引っ張ってその場から移動するルイズ。何処からか見ていたのだろう。

「なんだよ。お茶なら」

「何だよじゃ無いわ！ 何勝手に決闘の約束なんかしてんのよ！」

「で、何処に行くんだ？」

「ギーシュに謝るのよ。今ならまだ許してくれるかも知れない」
「嫌だね」

そついうと巧は足を止めた。

「別に俺は何一つとして悪いことをしたという気はない。ただ、あいつが自滅しただけだ」

「あんた、何もわかってない！ 平民は貴族に勝てないの。怪我ですめば良いほうなんだから！」

「怪我ですめば良いほう、ね」

今更だ。と彼は呟くと先程ギーシュに話しかけていた小太りの少年に場所を尋ねる。

彼は面白そうにその場所を告げると、巧は礼を言ってその場所へと向かって言った。

よほど退屈していたのだろう。

「マリコルヌ！」ルイズがとがめるように声を上げるが、とき素手に遅し。

巧は走ってその場所へと向かっていくのであった。

「いやあ、これは見物だねえ！」

なんて笑いながら言うマリコルヌとは対照的に、ルイズは眉間にしわを寄せて、

「もつっ！ 使い魔の癖に勝手な事ばかりするんだから！」

と叫んで巧の後を追いかけていくのであった。

異なる世界の異なる人間（後書き）

いやー面倒だね。

本当に。因みに他のライダー登場はデイケイドだけを考えています。

一応、話の都合を付けるために、けどね。

さて、ファイズギアを何て名前にしようか。

灰にする演出って無機物に対しても有効だっけ？

あれ、割と気に入ってるんだけど。

小規模な爆発が起こった後に紋章が刻まれて、そのまま灰になって崩れ落ちるの。

サイガ戦のときとか特に。

そんなこんなでのんびり続いていきます。

次は決闘です

o p e n y o u r e y e ' s f o r t h e n e x t f
a i z .

決闘と紋章、そして力（前書き）

早めの投稿になるよー。

バイクフロント部大破しちゃって何処にもいけないんだw

仕事もこのままじゃ差し支え出るしどうしよう。

ああ、原付に乗って遠出がしたいよ。大分市内から道の駅弥生まで行きたいよ。

温泉入りに行きたいよ。

旅がしたいよ。

普通二輪の免許が欲しいよ。

ということでもやることないので書いてました。

超道楽です。

てきとーです。

ということであっくんとギーシュの戦闘をご覧ください。

決闘と紋章、そして力

広場には大勢のギャラリィが巧とギーシュを取り囲むようにして立っていた。

その中には先程のサラマンダーをつれた少女もいた。

「逃げずに来たのは褒めてやろう」

「生憎とお前と違ってこっちは決闘なんて馬鹿げたことはやったことが無かったからな。別に逃げる理由が見つからなかったただけだ」

そんな会話で挑発する二人の間にルイズが割って入る。

「ギーシュ、いい加減にして。決闘は禁止されているじゃない」

「禁止されているのは「貴族同士」の決闘だよ？ 彼は平民、問題は無い」

「それは……そんなこと今まで無かったから……」

「ルイズ、もしや君はこの平民にその乙女心を動かしているとか」

「誰がよ。やめてよね。自分の使い魔がみすみすぼろくそにやられるのを黙ってみてられる訳無いじゃない！」

随分ないわれようだ。

少なくとも、こんな優男一人に負けるほど、自分は弱いつもりは無い。

そんなルイズを放って置いてギーシュは杖を振り上げる。

「君が何を言おうと」そのバラの花を一振りすると、そこから花弁が一枚地面に向かって落ちる。「もう決闘は始まっているんだ！」

花びらが落ちた場所が発光し、そこから鎧を着た何かが現れた。

「僕の名は青銅のギーシュ。したがって青銅のゴーレム、ワルキユ
ーレがお相手する」

唐突に現れたそれに、驚いた巧はゴーレムが放った拳を腹部に直撃
させてしまう。

防御すら出来なかった為か、腹部を押さえて、膝をついてしまった。

「汚えぞ……」

唸るようにそういつてしまう巧。今までの戦いで汚いも糞もあった
ものじゃ無かったが。

あまりの事に口に出してしまったのだ。

「メイジである貴族が魔法を使って戦うのは当然のことだろう？」

まるで勝ち誇った様にそういうギーシュ。

膝をついている巧に向かってルイズは走って近寄った。

「分かったでしょ？ 平民は絶対、貴族^{メイジ}には勝てないのよ」

「……邪魔だ。どいてろ」

眉間にしわを寄せて立ち上がる巧。

このくらいのダメージなら今までに何度もあった。

「ほう、手加減が過ぎたか」

「お前が手品を使うものだから驚いただけだ」

事実を言ってやる。

そんな彼にルイズはなおも説得を試みる。

「どうして立ち上がるのよバカ！」

「知るかよ、そんなもの。ただ、目の前の奴が俺に喧嘩を吹っかけてきた。だから俺はそれを買っただけだ」

「え？」

「そして売られた喧嘩はかつただけだ」

「名に分けわかんないこと言ってんのよ！」

そんな二人に向かってギーシュは言う。

「ま、ルイズの持ち物を壊しちゃ悪いし、ここで謝れば許してやるよ」

「お前は馬鹿か？ お前くらいに頭を下げていたら、俺は今まで何人に頭を下げてこなけりゃならないんだ。こんな人形風情にやられてられるか」

「そうかい……！」

どうやらその言葉で完全に頭に血が上ったらしい。

先程とは全く違う速度で巧に殴りかかってくる。

全く異世界ってのは何でもありなんだな、なんて考える。

ゴーレムの攻撃を涼しい顔をして回避していく巧。

こんな程度の動きは所詮そこらの雑魚にしか過ぎない。

だが流石に素手で、金属を殴るのはあまりに危険だ。

(いやまてよ……？)

どうして自分はこの人形を相手にしてるのだろうか。

そもそもこれは自分とギーシュの決闘である。何を相手の流儀に合わせて戦ってやる必要がある。

彼がその事に気がつくと、すぐさま行動を起こした。

放たれてくる拳を軽々とかわし、そのまま無防備なギーシュへと一
気に詰め寄る。

一瞬の出来事に呆気に取られたギーシュは巧の拳をその腹部に食ら
う。

「お返しだ」

短く手首をスナップさせてそういう巧。

よほど最初に一撃食らったのが気に食わなかったのだろう。

そのままわざと距離をとってやる。

追撃しないのはわざとだ。

「ふ、フフフ……平民の癖になかなかやるじゃないか」

不適に笑うと、ギーシュは杖を二度振ってやる。

地面に落ちたそれから何体かのゴーレムと、一本の剣が現れる。

自分自身はその剣で武装し、防御を固め、ゴーレムで攻撃をさせる
という魂胆なのだろう。

本気を出した、とはいっても所詮は数が増えた程度。

その程度なら、彼にとっては大したことではない。

もう一度軽く腕をスナップさせ、曲げた膝に腕を置く。

そして走る。

向かってくるワルクイールの攻撃を回避しながら、逆に足場として
利用してギーシュへと近づぐ。

ここまでではある程度予想していたのか、彼はその手に持っていた剣
を振るう。

が、巧から見れば、それはあまりにも遅すぎる速度。

腰をかかめてそれを回避すると、次に剣を握っていた手を掴んで腹
部を何度も殴ってやる。

剣を手放し地面を転がったギーシュに対して追撃を行おうとする巧

を背後からワルキューレが攻撃してくる。流石に対応しきれずに攻撃を背部に受けてしまうが、そのまま前転してギーシュの落とした剣を奪う。それと同時に巧の体に不思議な現象が起きる。左手の紋章が輝き、途端に体が軽くなった。一体何が起きたというのだろうか。これも、魔法という奴の一つなのだろう。とりあえずは納得することにする。これで、あれを使っているときのように動けるなら、問題は無いと思うことにしよう。手に持った剣を振るい、一体のゴーレムを切り裂く。ついいつもの癖で腰に手をやり、バックル部をいじってしまう。そこにはエンターキーがあり、必殺の一撃を与えるために必要な行為だった。別にあの姿になっていないっていうのに、こんな行為をしてしまう自分に内心苦笑しながら次々切り捨てていく。全ての敵をあっさり切り伏せてしまうと、剣をほうり捨てる。そして再び接近。ダメージから回復しきれず、その場で四つん這いになっているギーシュの腹部を蹴り上げる。そのまま転がっていくギーシュ。誰の目から見ても、勝敗は明らかだった。最早立ち上がる気力すらないギーシュに対し、十二分に余力を残している巧。結局巧がまともに攻撃を受けたのは最初と、背後からの一撃のみ。どちらも不意打ちに近い一撃だった。あまりに一方的なその結果にただ周囲は沈黙してしまう。巧の戦い方にも恐れを抱いてしまったのだ。あまりに暴力的なラフファイト。相手に反撃すら許さない圧倒的な暴力。それが見るものに恐怖を与えたのだった。

「……つたく」

面倒くさそうに溜息をはきながら頭をかく。
そうしてそこから立ち去ろうとする。

『あの姿』を使わなくてもよかった、というのは彼の自己満足だろう。

そういえば、あの剣を捨てた瞬間に、体の感覚が元に戻った。
左手を見てもう一度確かめる。先程のようにには輝いておらず、ただ
訳のわからない文字が刻まれているだけ。

これが新しい力なのだろうか。この世界での守るための力。
何を、守るのだろうか。

乾巧には夢が無かった。だが、あれを使うことによって誰かの夢を
守ることが出来た。

この世界では何を守る事が出来るのだろうか。

「ちょっとあんた!」

「なんだよ」

ルイズが駆け寄ってくる。

「体はなんとも無いの?」

「別に。なんとも無い」

「……そんなことよりもあんた一体何者なの? 素手でメイジに勝
つ平民なんて聞いた事無いわよ」

「……ただの元クリーニング屋だ」

そういうとどこかへと歩いていってしまっ。

その後姿は何も聞くな、追いかけてくるなといっているかのようだ
った。

一体、何なのだろうか。

あの卓越した戦闘センスは。

ただの平民ではない。よくよく思えば、出会って間もないとは言え、ルイズは彼の事を名前以外何もよく知らない。

ただ、乾巧という平民の男、それだけだ。

ただやるせない無力感だけが、ルイズを襲う。

結局自分はゼロのままじゃないか。

「しかし、腹が減った」

一人歩きながら呟く。

朝は何も食わずに、しかも先程のあの激しい戦闘。

そろそろ彼の空腹も我慢できるレベルを通り越していた。

そこであたりが良い香りが漂っているのに気がつく、それに引き寄せられるように歩いていく。

食事処か何かだと思い込み扉を開いてしまう。

そして、扉を開けた瞬間に自分はこの世界での通貨を所持していない事に気がついてしまうのであった。

決闘と紋章、そして力（後書き）

文字数少ないのはここまでしかかけてないからなの。
きりもよかつたしね。

たつくんはこのくらいで良いと思うんだ。
生身での戦闘能力なら、ただのドットメイジ、しかもゴーレムを使
役して戦うような奴なら大して問題じゃないと。
剣持った後の演出はゼロ魔から。本当はあんまり金属で金属を切る
演出は好きじゃないけどね。

……実はファイズを使いたいけど矛盾があるのよねー。
どう解決するか。

ま、おいおい考えよう。

次回は戦闘シーン無しの予定。
フーケあたりだっけ？ 戦闘って。
あの辺でファイズだそう。

夢を見るもの、戦うもの。
力を欲するものは何故求めるのだろうか。
何の為に。

彼はその力をどのように使うのだろうか。
夢の守護者よ、紅の力を見つけ出せ。

o p e n y o u r e y e ' s f o r t h e n e x t f
a i z

猫舌とゼロと普通（前書き）

特に盛り上がりがないどうでも良い回。

おじさんが中途半端に律儀な所為でこうなったw

あれだよね。ルイズと巧の組み合わせって結構良いと思うんだ。

あと、サイトはご都合主義で登場させることにしました。

脳内プロットもとりあえず最後まで出来たし。

シナリオ的にはアニメ二期最後まで行って終わりです。

小説読んだ事あるけど学校の図書室から借りたものだからよく覚えてないのよねw

図書委員長の特権最高！

手にある資料と言う事で、アニメを基準に進めたいです。でも本当は小説準拠で行きたい……。

猫舌とゼロと普通

空腹に急かされて足を運んだ先は厨房だった。

丁度良い。

少しばかりここで食料を分けてもらうことにしよう。

流石に飲まず食わずは体に堪えるものがある。

「あら、使い魔さん？」

不意に声をかけてきたのは、広場にいたあのメイドだった。

良いタイミングだ。彼女に少し食料を分けてもらう様に交渉してみよう。

「どうかなさったのですか？」

「いや、少し食べ物に分けて欲しくてな。朝から何も食ってないんだ」

「そうだったんですね。ちょっと待っていてください。マルトーさんに余り物が無いか確認してみます」

まさに渡りに船。

彼女が一人の髭の生えたコックに何かを話しかけると、皿をにいくつかの料理を乗せて行く。

その光景を眺めながら巧はぼんやりとなるべくなら冷えた物がいい、と思うのであった。

「どうぞ。ありあわせのもので申し訳ありませんが」

「いや、きにするな。ありがとな」

近くにあったテーブルを借りて食事にする。
当然、中には熱々のシチューなどのものもあるわけで。

「ふう、ふう、ふう、ふう」

巧は熱々のシチューをすぐに口には運ばずに、何度も息を吹きかけて冷ましてからゆっくりと口へ運ぶ。

そんな巧の姿を見たメイドはある言葉を口にする。

「もしかして……猫舌、ですか？」

その言葉を聞いた途端に、巧の眉根にこれまで以上の皺がよる。

一番聞きたくない言葉だ。

実は一番気にしている言葉だったりもする。

「あ、気になさっていたのですか？ ごめんなさい。まさか、貴族を倒したお方がこんな可愛らしい弱点を持っていたなんて思わなかったものですから」

くすくすと彼女は笑った。

別に馬鹿にしているわけではない。ただ、意外な発見をしたただけだったのだろう。

どうやら、彼女も先程の戦闘を見学していたらしい。
物好きなことだ。

「お、お前さんが貴族に勝ったって言う平民か？」

メイドと話をしていると先程の口髭のコックが話しかけてきた。

「まあな」

そっけなく返答してシチューを冷ますことに専念する。

「そうか、お前さんが俺たちと同じ平民でありながら貴族を倒したって言う英雄は」

「英雄？」

「そつだ！ あの偉ぶった生意気な小僧に勝ったんだ。我ら平民の誇りだよ」

「そうかよ。別に俺は英雄になるつもりもなつたつもりも無いけどな」

そついつてシチューを口に運ぶ。

別にただ単に喧嘩を売られただけだ。

それにあのくらの奴なら今まで何度も相手にしてきた。

むしろあいつなんかよりも、もっと強力な敵がいたのだから。

人を殺す灰色の化け物、そんな連中を相手にしていたのだ。

今更少々の手品を使う人間相手に遅れを取るわけが無い。

そのくらの話だ。

それで英雄と呼ばれるなら、自分の友人は英雄ばかりということになる。

「がっはっは、きいたかい！ 本当の強者つてのは常に偉ぶらないもんだ！ いいねえ気に入ったよ我らが剣」

「言つてて恥ずかしくならないのか、それは」

溜息をはきながら食べ物を口に運ぶ。

巧もそれなりに恥ずかしいことを口にしてきたのだが、このおっさんのように軽々しく口にしたことは無かつたつもりだ。

旅をしていた理由も。化け物を殺すと決めたときの言葉も。

「そういえば、まだお名前を伺ってませんでしたね。私はシエスタと申します」

「乾巧だ」

「イヌイタクミさん、ですか。変わったお名前ですね」

「お前たちのほうが変わっているけどな」

ルイズにも同じことを言われたのを思い出して溜息を吐く。

日本人の名前はやはり此方では違和感があるのだろう。

「巧さんは一体何処であんな体術を学んだのですか？」

「まあ、ちよつと、な。あんな子供だましの玩具なんかよりも、もっと恐ろしい化け物を相手にしていただけだ」

「もしかして、ドラゴンとかですか！」

「……確かに、そんな奴もいたな」

誰よりも早く、強く、又気の狂った化け物の事を思い出す。

触れたものを灰にする力を持った最凶の怪物。

「すごいです！ まさかドラゴンを相手にしたことがあるなんて！」

勝手に話が盛り上がっていくを横目に食事を終えると、巧は立ち上がって礼を言う。

「ありがとな。上手かったぜ」

そついうとそのまま立ち去ろうとする。

満腹になった以上、ここにいると余計な詮索をされる。

そつすれば結局あれのことについても話をしなくてはならない。

自分は本来死んでいたはずの人間だということも。

「あ、巧さん！」

「何だ？」

「また、いらしてくださいね！」

「……気が向いたらな」

彼はそういって、食堂を後にした。

さして今日はやることも無い。

それにまだ日中だ。

この何も無い世界。空気がおいしく、ただ空が美しいだけの世界でやることは、一つだけ。

ぼんやりと誰もいない日当たりの良い場所に寝転がり、昼寝を始める。

最後の瞬間も、彼の隣には二人の友人がいた。

そしてそこで自分は……。

別に不満なんて無かったはずだ。

夢を見つけることが出来たんだ。そしてそれを叶えてくれる友もいる。

自分だけの力では無理でも、きっといつか誰かが叶えてくれる夢。

だから、自分はもう舞台から去って良かったんだ。

なのに、何で自分は灰にならずにこんな世界へと訪れてしまったのだろうか。

分からない。

ここで自分は一体何をすべきなのか。

使い魔として召喚された自分は所詮あのちんちくりんの道具として生きていくことになるのだろうか。

誰かに縛られたまま言われるがまま、それは楽なのかもしれないだろう。自分もそれを選択したのかも知れない。

けれど自分は死という選択をした。

決して報われない、死の選択。

そうすることで自分が英雄になったつもりだったのだろうか。

そんな感情が一切無かったといえれば嘘になるのだろう。

だけどそれはきつと全ての人の味方なんて傲慢なものじゃなかった。せめて自分の手が届く先にいる人を助けようと、そう努力しただけの結果にしか過ぎない。

方法は悲惨だった。所詮自分は人殺しと蔑まれる存在にしかすぎない。

あてども無い考えを抱いたまま彼は脱力する。

きつとここなら良い夢が見れるだろう。

そう思いながら。

「いつまで寝てるのよ!」

唐突に腹部を強烈な痛みと圧迫感が襲い掛かり、目を覚ます巧。

「なにすんだよ!」

咳き込みながら凶行に及んだ犯人をにらみつける。

犯人は自分のご主人様を名乗るルイズだった。

「まったくいつなつても帰ってこないから探してみればこんなところで昼寝をしているなんて」

「別に俺が何処で何をしていようと俺の勝手だろ」

「あのね、貴方は私の使い魔なの。ご主人様の私の近くにいるのは当然でしょ」

そんなことは知ったことじゃないと巧は悪態をつく。

気がつけばあたりは薄暗くなってきたており、風も心なしか冷たくなってきた。

「それより、随分と手荒にやったがあいつは平気なのか?」

「あいつって……?」
「あの金髪だ」

意外だったあんな戦い方をしておいて相手のことを気にするなんて別に残酷な中でも、暴力的なのでもなく、ただ単に戦い方があんな風なだけで結構やさしいのかもしれない。

「別に、少し気を失っただけよ。別にそこまで体に異常があるわけじゃないわ」

そうか、と短く返答するとそのまま立ち上がる。

「何処へ行くのよ!」
「お前の部屋に帰るんだよ。使い魔ってのは一緒にいなけりゃならねえんだろ?」

そういうとそのままルイズを置いてけぼりにしたまま歩いていく。つくづく自分勝手な使い魔に腹を立てるルイズ。その場で地団太を踏むと、そのまま追いかけていった。

空に浮かぶのは二つの丸い月。紅と蒼に染まった二つの月がまるで巧を選んだかの様に。
彼を狼へと変貌させんが如く、輝いていた。

翌日、朝日が照らす中呆然と巧は立ち尽くしていた。
なぜか。それは目の前にある衣服が大量に入っていた籠を見ていたからだった。

「……なんだよ、これ」

「あんたがサボっていた仕事の一つ」

「これを俺に洗濯しろってか？」

「そうよ。あんたは私の使い魔でしょ。だったら雑用くらい死なさいよね」

「それも使い魔の仕事だったか？」

「そうよ。分かったら早くなさい」

有無を言わさぬ口調で、ルイズが言う。渋々従う巧であったが、本音はどうでもよかった。

もともとクリーニング屋でバイトをしていた巧にとっては手馴れたもの。体になじみついた行動の一つ。

手馴れた作業で洗濯物を片付けると、そのまま外でぼんやりと雲を眺める。

目の前ではさまざまな異形の姿を携えた少年少女たちが歩いていつている。

あんな中で自分は異形とはならないのだろう。

けれど、自分は別にそこまで気にする暇は無いらろう。

「終わったのね。ならさっさとついてきなさい」

「何処に行くんだよ」

「授業に決まってるじゃない」

何を今更、といわんばかりに彼女は言った。忘れていたが彼女はまだ学生なのだった。

溜息をはきながら、彼女の後ろに続く。

魔法ととやらの授業は一体どんなものだろうか、と好奇心を抱きながら。

「火、水、土、風の魔法は複数組み合わせることで更に強力になり別な効果を生み出します。そして私たちメイジはいくつ組み合わせ

ることが出来るかでレベルがレベルが決まりますが、そのレベルは？」

教壇では小太りの女性教諭が講義をしている。

それをルイズの隣で眺めていた巧は、思っていたよりも地味で退屈なものだと感じた。

自分の世界には無い理屈ゆえに、どんな理屈があるのかと思いきや、自分たちでもそれを理解していないようだ。

あるのは基礎的な知識のみ。

まるで電化製品の使い方を知っているのに、電化製品の作り方を知らない自分たちのようで、滑稽だった。

ギーシュに平手をぶつけた少女が教壇の教師の質問に答えると、彼女は再び話を続けた。

「皆さんはまだ一系統しか使えない人が殆どだと思いますが……」

「ミス・シュヴルーズ、お言葉ですが、まだ一系統も使えない魔法成功率ゼロの生徒もおりますので」

その言葉を言った瞬間に教室の視線が一気にルイズへと向いた。

その瞬間に巧は理解した。

だからゼロのルイズなのだと。

そんな人間の下に自分が召喚されたのは何の皮肉だろうか。

ゼロのルイズに、化け物の自分。

その気になればドラゴンすら圧倒する戦闘力を持った姿にもなった。

「お前、魔法が使えないんだってな」

廊下を移動中に巧はそう尋ねた。

「そつよ」

「そうか」

短いその会話の中にはどんな感情が含まれていたのだろうか。普通の人間でありたい巧と、ゼロであることを拒むルイズ。その二人の間には耐え難い矛盾がある。

「……俺はそつちのほうが良いけどな」

ぼんやりと何気なく呟いた彼の一言が、なぜかルイズの心に深く刻み付けられた。それに怒りを覚えるわけでもなく、ただ悲しく、彼女を突き刺しただけだった。そうして夜。

主人からの了承も、半ば強引に得て廊下を歩いていた巧。ぼんやりと、夜の散歩に出ようとしたのだ。

もう少し、自分には考える時間が必要なのだ。この世界で自分を考える必要性が。

その途中、道を阻んだのは赤色の尻尾に炎を灯した馬鹿でかいトカゲ。

流石の巧も、これにはたじろいでしまう。

じりと動くのをためらっていると、唐突にトカゲが動いた。かろうじて回避するが、敵意は感じられない。

ただ、じゃれ付いてきたか、もしくは別の目的があったか。

「何の様だ」

短く問い尋ねると、足元まで近づいてきてズボンの裾を加えた。ついて来い、とっているのだろう。

どうやらこいつの目的は自分を連れてくることらしい。

ならおとなしくついていったほうが良いだろう。

ここであの姿になる可能性はなるべく避けておきたい。
連れて行かれた先は一つの部屋だった。

普通に扉を開けて中に入る。中は明かりがついておらず、外からの月明かりだけが頼りだ。

そんな中にいたのが褐色の肌を持つ美女。

名前は確か、キュルケとかいった。

不可解なのはなぜか下着姿であるということだ。

「いらっしやい。ようこそ、私のスイートルームへ。イヌイタクミ
「何のつもりだ」

「いけない事だとは分かっているわ……。でも、私の二つ名は微熱。
松明みたいに燃え上がり易いの」

「そうかよ」

だからどうした、といわんばかりに返答してやる。

「お分かりにならない？ 恋しているのよ、私、貴方に」

背筋に良い様の無い悪寒が走る巧。

なぜかは分からないが、この女は信用するに値しない。

「恋はまったく、突然ね」

「……………」

「貴方がギーシュを倒したときの姿！ 格好良かったわあ……。あ
れを見て、微熱のキュルケは情熱のキュルケに 成ってしまった
の」

猫が甘えるようなしぐさで近づいてくるキュルケ。

こんな女には必ず裏がある。

それに、こいつのしぐさ一つ一つがひどく気に食わない。

所詮、ルイズの同類か何かだろう。

キュルケが瞳を閉じて、唇をそつと顔を遠ざけている巧に近づけていく。

そのとき！

「キュルケ！」

「あらすティークス」

男が窓から顔を出していた。

「待ち合わせの時間に君がいないから来て見れば……」

「じゃ、二時間後に変更して」

「話が違っじゃないか！」

こんなことだろうな、とは思っていたが。

まさか予想通りだったとは。

一応追い返しはしたものの次々と現れてくる男たち。

最後には全員が押し寄せてくるという結果に至ったものの、トカゲが火を吐いて結局追い返した。

こんな世界だ。大丈夫だろう、と思って溜息を吐いた。

「生憎だが、俺はお前みたいなガキに興味はない」

正直胸は惜しいが。

まあ、確かに人一倍大人びた風格は出しているものの、所詮はその程度。

子供は子供だ。

するとタイミングよくルイズが現れた。

なんという幸運だろうか。

「さて、迎えも来たから帰るぜ。じゃあな」

そういつと部屋をさっさと後にする。

「ありがとな、助かったぜ」

まったくどうやって逃げようか考えていた彼には実に幸運なことだった。

「何であの女のところにいたの！」

「あのトカゲに連れられたんだよ。別に行きたくて行った訳じゃねえ」

「まったく……どんくさいわねえ。ギーシュを倒したくせに」

「あいつは人間だったからな。化け物相手は分が悪い」

「まあいいわ。でもツエルプストーの女に誑かされちゃいないでしようね」

「生憎だが俺はガキに興味は無いからな」

「そう。なら良いわ。言つとくけど、あのツエルプストーの女には何もくれてやる気は無いから。良いわね！」

どうやら名前で呼んでいないところを見ると、あの少女とは何らかの因縁があるらしい。

個人的なものもそうだろうが、他にも家柄的なものもあるのだろう。自分の世界でも、そんなことはあった。

身分の差は何処にだってあるものだ。何処の世界にも、いつの時代にも。

さしずめ巧の場合は身分ではなく、種族の壁といったところだろうか。

「あんな胸しくない女になびく男なんて……」

良いかけて思い出した。

お調子者で、ギターの夢を持った化け物の事を。

「いや、なんでもない。気をつけることにする」

「そう、それが懸命ね」

何とか自衛の手段を考えなくては。

幾ら経験があると言っても、今のままではこの世界は余りに危険すぎる。

ファイズの力も無い以上、自衛の手段というのは必要なものだ。

妙な女に目をつけられた以上、大手を振って外に出ることも出来やしない。

今後の課題の一つだろう。

猫舌とゼロと普通（後書き）

話の都合上順番を入れ替えました。
許してください。勝っちゃうシナリオだから、こつするほか無いの
よ。

ファイズならドラゴンくらい勝てると思ってしまっ。

今回は話を捻じ曲げてあの人たちを登場させるの。嫌いじゃないわ！
オリジナルの展開の一つだけど……不安だなあ。

まあ、やりやすいつちゃそうなんだけど。

超ご都合主義入れて見ます。

言葉を話す剣を手にした青年は矛盾した力を再び持つ。

そんな中、同じ世界から現れた少年と出会う。

紅の閃光を放つ彼の力。

失われたはずの、遺して来た筈の力。

運命とは因果な物。

彼の友が遺した最後の希望を、再び彼は手にする。

o p e n y o u r e y e s f o r t h e n e x t f
a i z . . .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3760z/>

ゼロの使い魔、たっくんが使い魔になりました。

2012年1月4日23時51分発行